

循環する農業の理想型。時代遅れの不便なものではなく、馬だからこ
のできる有効性を発信していきたい」と語る。
(頼永博朗)

NPO法人都留環境フォーラム

■石油いらいず

加藤さんは東京都新宿区生まれ。自然の中で子育てをしようとして、都留市平栗の森に土地を購入し、自ら整地して家を立て、平成18年に東京都世田谷区から移住した。自宅では妻と2男2女とともに、鶏40羽、羊3匹、犬2匹、それに馬耕のために鳴沢村の牧場から今年9月に購入した雄の3歳馬と一緒に暮らす。

加藤さんによると、馬耕は昭和30〜40年代以降、ト

NPO法人都留環境フォーラム 平成22年設立。スタッフは加藤大吾代表理事を含む5人。事業コンセプトは、環境に配慮した町づくり▷地域文化の継承と地域の自立の促進。無農薬でのコメや小麦、大豆の生産、在来作物の栽培のほか、都会の子供やアジアの青年を受け入れてのエコツアーなども開催している。山梨県都留市十日市場1531の2。☎0554・46・0039。



「馬耕を普及させたい」と語るNPO法人都留環境フォーラムの加藤大吾代表理事―都留市十日市場

「馬耕」で循環型農業を

トラクターなどの農業機械の普及に伴い廃れたという。馬耕に取り組みきっかけについて、加藤さんは「馬をトラクター代わりに使えば燃料の石油が必要ない。石油が手に入らなくなったときの補完となる手段を用意しておかなければならないと考えた」と説明する。

■ワークショップ

TEFの馬耕は今年9月13〜28日、「馬と耕す暮らしワークショップ」と題し、広く参加者を募って都留市内で行われた。参加したのは、会社員や主婦、アウトドアのインストラクター、田舎暮らしの実践者ら県内外の男女15人。

指導には、馬を使って木材を山から運び出す伝統的な「馬搬」を行っている「馬力舎」(岩手県遠野

機代表の協力を得た。作業は、馬小屋づくり、馬耕農具づくり、馬の調教の順で日を追って講習形式で進行。最後に、約2千平方メートルの畑を実際に馬を使って耕した。畑には小麦を植え、収穫は来年6月頃を予定する。

■全国へ出張も

加藤さんは、馬耕のために購入した馬を「耕太郎(コウタロウ)」と名付けた。「馬のふんは堆肥として使えるし、馬は人が食べないワラを食べてくれるので、持続可能な農業を行える。馬の飼育は子供の教育にもいい」。馬と暮らすことの魅力を実感している。

来年春には、約5千平方メートルの水田での馬耕にも挑戦するという。また、馬耕の普及に向けても夢を膨らませている。

加藤さんは「全国各地へ『出張馬耕』を提供できるように、馬を使った農法の確立に励みたい」と意気込んでいる。



ワークショップ形式で行われた馬耕―都留市平栗